第一問　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人工知能（ＡＩ）やロボット技術がものすごい勢いで発展している。囲碁の世界チャンピオンを破ったと思ったら、あっという間に人の能力を置き去りにして、囲碁ＡＩプログラムどうしで腕を磨き、今まで人が見たこともないような展開や作戦を発見し、「囲碁」というゲームの世界を作りかえてしまった。

同じようなことが、書類の作成や簿記や経営判断などでも起こるのか？　だとすると、ほとんどの人間は失業者になってしまうのか？

そうなる、と予想する人もいる。ＡＩが全人類を合わせた知能を上回る技術的特異点（シンギュラリティ）までもうすぐだと言ったアメリカの未来学者レイ・カーツワイル。あるいは、人類は技術とデータを独占できる富裕支配層と、それらを管理する能力や経済力を持たない被支配層とに二分され、後者は奴隷のような地位になるという未来を予想するイスラエルの歴史家ユヴァル・ノア・ハラリ。彼らの描く未来像は、限りなく暗い。

ＡＩ／ロボットだけではなく、ゲノム編集技術や脳と機械の接続（ブレイン・マシン・インタフェイス：ＢＭＩ）など、生命や人間の側を操作する技術の発展もとどまるところを知らない。ほんの数十年前までは、遺伝子をオオザッパ(1)に組み換えることすら「神の領域の冒瀆（ぼうとく）」と批判されていたのが、(2)遠い昔のことのように思える。

これらの状況を目の当たりにすると、科学技術はとどまるところを知らず暴走していると言いたくもなる。ある意味では、もちろんそうだ。しかし、ちょっと待っていただきたい。科学技術が暴走するのは、昨日今日の話ではない。はるか大昔から、ひょっとすると何万年、何十万年も前から、ぼくたちの技術はずーっと暴走してきたのではなかろうか。

たとえば農耕。その起源は茫漠（ぼうばく）としているが、現在のところ最古の農耕の証拠は今から二万三〇〇〇年前のイスラエルあたりにさかのぼるとされている。今から一万年ほど前になると、西アジアや中国でも農耕が行われるようになってくる。

この農耕、食料を安定して生産することができるので、あちこち移住する必要がなくなり、人々の栄養状態もよくなって人口が増え、生産力が上がれば富の余剰が社会に蓄積されて強大な統治権力を生み出す母体となったとされている。

だが、農耕開始期からしばらくの間、人口はむしろ減少したことが知られている。人々が同じところに密集して、しかも長期間その状態で生活するようになったため、感染症による被害の規模が大きくなったのだ。

人類に害悪をもたらした技術は農耕に限らない。さまざまな武器は戦争での死者を増やした。運搬や移動のための技術も、移動中の事故で怪我や

死亡が生じる。生産のための鋤(すき)や鍬(くわ)も水車ですら、事故はつきものだ。もちろん、これらのデメリットを上回るメリットをもたらしてくれるからこれらの技術は定着したのである。だがその一方で、(3)技術には負の側面が常に付きまとう。

技術が非人間的なのは、今に始まったことではない。ＡＩやロボットなどの先端技術が人類社会に与える影響の少なくとも一部は、今までの技術革新の影響を歴史的に振り返れば見当がつくのである。失業者は出るだろう。仕事の中身も変わるだろう。一方で社会全体の生産性は上がるだろう。その恩恵を被ってさらに豊かになる人々もいる一方で、新しい技術を使いこなせずに貧しくなる人もいるので、経済格差は大きくなるはずだ。だが、その格差が支配層と奴隷のような被支配層とに分かれて固定するまでになることは、まずないだろう。

もちろん、だからといって、ＡＩやロボットなどの先端技術が社会に与える影響のすべてが過去の技術革新から類推できるわけではない。これらの技術が今までとは決定的に異なる点もいくつかあるからだ。

まず第一に、従来の技術は人間の能力を増強する方向で開発されてきたが、現在の先端技術は新たな判断や情報を提供することで、人間が機械に従うような方向性の働きかけをする。このような、機械から人へという方向に情報を発信する機能は、テレビやラジオなどのメディア技術に始まるものである。たとえば、テレビでコメンテーターの解説を聞いて新商品の購入を決めたりするように、メディア技術から発信される情報は、発信者の意図や目的に沿う行動を視聴者にうながすことが多い。

第二に、従来の技術は人間ひとりひとり、あるいはせいぜい数人から数十人ぐらいの能力を増強したり運搬したりするものだったのが、現在の先端技術、とくに情報関係の技術はぼくたちを取り巻く環境となって、あらゆるところに(4)ヘンザイしている。このような外部環境化も、メディア技術や通信技術あたりから見られる特徴だ。

第三に、人体の内部に技術が入り込んでいることだ。今までの技術はたとえば望遠鏡や顕微鏡のように、人体の外部にあって付加的に人間の能力を拡張していたが、現在のマイクロマシーンや人工臓器などは人体の内部に深く入り込んで、一体化している。

第四に、ＡＩやロボットは人の代わりとなっていろいろな仕事をしてくれる、エージェントとしての機能を持っている。単に人に使われる道具ではなく、自律して動く仲間なのである。

これらの点――自律化、環境化、内部化、代理性――は、従来の技術にほとんど見られなかったか、見られたとしてもごくわずかでしかなかった特徴だ。言いかえると、もともと人と共生体を形成していた人工物は、ここにきていよいよ人体との一体化の度合いが高くなってきたということである。

これが将来どのような帰結をもたらすのかは、現在のところはよくわからない。もちろん良い面も多数あるはずだが、人間の認知能力などに悪い影響を与える可能性も否定できない。新しい技術の導入は、少しずつ様子を見ながら進めていくしかないだろう。

人間の、新しい技術に対するイメージは、常にアンビバレントだった。中世ヨーロッパでゼンマイ仕掛けの時計が出現したら、これは生命の仕組みを具現化したものだと持ち上げる人たちの一方で、教会の塔に据え付けた時計の時報が聞こえる範囲が「都市」として定められることで、それまでの自由を失う人たちも出てきた。それらの人々にとっては時計のイメージは自由の喪失であり、管理の象徴である。

あるいは、一九世紀にアメリカで消しゴム付き鉛筆が発明されると、便利なので急速に普及したが、その一方で子どもたちが字を書く際に後でも消せるからと安直になるとの批判も起こった。イギリスの小学校では消しゴム付き鉛筆の使用が長い間禁止されていたほどである。

新しい技術への賞賛と嫌悪の入り混じったまなざし――これを、SF作家のアイザック・アシモフは「フランケンシュタイン・コンプレックス」と名付けた。一九世紀ゴシックロマンの傑作、メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』に登場するモンスターは、その製作者や家族や友人たちの命を次つぎに奪っていく。人は、みずからが生み出した技術によって滅ぼされるという恐れを、常にいだいているのではないか――人々の抱く技術イメージを、アシモフは(5)喝破した。

(6)このアンビバレンスは新しい技術が出現するたびに再生産されてきた。しかし、昨今の自律的技術や生命操作技術に関しては、おそらく先に挙げた四つの新しい特性ゆえに、ことにその度合いが強いように思う。ロボットやAIは、たとえば『鉄腕アトム』に登場するプルートゥのように、とてつもない破壊力を持ち、災厄をぼくたちにもたらすものとしても描かれてきたし、ぼくたちのさまざまな問題や悩みを解決してくれるドラえもんのようなものとしても描かれてきた。フランケンシュタインという名前が、他ならぬ、このような人体再生技術をもたらした発明者と結びついていることが象徴的だ。

ロボットやAIは、結局のところ、敵なのか、味方なのか？　どちらでもある、という答しかありえないのだが、そこに多少なりとも選択の余地がぼくたちに残されているのであれば、やはりそれは味方であり、友であってほしい。

古来日本では、人工物と人の境界をあまり重視せず、ロボットなどの技術に対しても西洋社会より友好的だとされてきた。その背景にはアニミズム的心性があると指摘する人類学者もいる。人形供養や針供養など、長く身近にあった道具の寿命が尽きたとき、ただそれらを捨てるのではなく、命あるもののように弔う。カメラのようなもっと現代的な道具についても、それは同じだ。外観も機能ももっと人間に近いロボットとなれば、共感の度合いはもっと高くなる。

フィクションの世界で描かれるロボットの姿も、日本では鉄腕アトムやドラえもんやガンダムなど、友好的であったり人間の完全な道具であるものが多い。さらに新しい《攻殻機動隊》では、人間と機械が一体となった姿が描かれる。それに対しアメリカやヨーロッパでは、すでに名前の出た『フランケンシュタイン』を始めとして、ロボットの語源となったカレル・チャペックの戯曲『ロボット（R・U・R）』、映画の《ターミネーター》、《2001年宇宙の旅》など、人類に危害を加える敵としてのロボットやAIが主流ではないか。

もちろん、東洋／西洋という二分法はあまりにも単純化しすぎており、取り扱いには注意が必要だ。より実証的なデータも集めなければならない。しかし、技術と社会の関係は双方向的であり、社会の背景には文化システムが(7)ゲンゼンと横たわっていることも事実だ。新しい技術と社会の関係を考える際に、やはり文化システムのあり方を考えることは不可欠である。

だとすれば、人と人工物の距離が近いという日本の文化や社会の特性は、AIやロボット技術との共存を目指す際に、ひとつの拠り所となるのではないだろうか。

日本が長年培ってきたノウハウとその背後にある機械観を抽出することは、AIやロボットとの共生が必須の時代における新しい社会的価値を形成する上で、きっと役に立つはずだ。

暴走を繰り返す科学技術は今まで何度も私たちを(8)ホンロウし、大きな災厄をもたらしてきた。しかしそれでも、人類はどうにかこうにかそれらを手なずけ、飼い慣らし、豊かな社会を実現してきた。AIやロボットとて例外ではない。いや、例外にしてはいけないのだ。

（佐倉統「科学技術は暴走しているのか？」による）

一　傍線部(1)(4)(7)(8)のカタカナを漢字にする場合、それに使用する漢字を含むものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 1 ～ 4

(1)　オオザッパ 1

1　別の問題がハセイしそうだ。
2　事態のハアクに努める。
3　全国大会のレンパを達成した。
4　社会にハモンを投げかける。
5　監督が選手にハッパをかける。

(4)　ヘンザイ 2

1　事故現場のシュウヘンを調査する。
2　学生時代の読書ヘンレキを語る。
3　戦時中のヘンコウした教育。
4　すべてのザイサンを失う。
5　飲みやすいジョウザイの薬にかえる。

(7)　ゲンゼン 3

1　この運用方法ではガンポンが保証されない。
2　待遇改善にシュガンを置くことにした。
3　仏堂の中はソウゴンな雰囲気だった。
4　昨日の件に関してタゴンは無用です。
5　悪事を働いたというケンギがかかる。

(8)　ホンロウ 4

1　決勝進出できればホンモウだ。
2　自由ホンポウな生活をしている。
3　諸国をルロウする。
4　従業員をイロウする。
5　友人をグロウするのは許せない。

二　傍線部(2)「遠い昔のことのように思える」とあるが、このような表現がもたらす効果の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 5

1　時間は大きく隔たるのになぜか共通点を感じさせる表現を用いて、ほんの数十年前のことでも現在とは異なる点を強調する効果
2　時間の長さを誇張するような表現を用いて、最近の技術革新が人間に与える影響の大きさを読者に確実に伝えようとする効果
3　過去の出来事として確認する表現を用いて、過ぎ去った時間を戻すことができないという後悔を読者に自然と感じさせる効果
4　過去を理想化するような表現を用いて、人間の限界をわきまえながら神への畏敬の念を持っていた時代を懐かしく思わせる効果
5　過去との隔たりを意識するような表現を用いて、ここ数十年の技術革新とそれに伴う意識の変化の速さを読者に印象付ける効果

三　傍線部(3)「技術には負の側面が常に付きまとう」とあるが、筆者はどのようなことを「農耕」技術における「負の側面」として挙げているか、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 6

1　農耕による生産力の向上が富の不均衡を生み、経済的な格差が生まれたこと
2　農耕によって人々が同じ場所で生活するようになり、強大な統治権力が生まれたこと
3　農耕による経済格差が争いを生み、新たな武器の発明が死者を増やしたこと
4　農耕による定住化で感染症の被害規模が拡大し、人口を減少させたこと
5　農耕により人工的な耕作地が生まれ、開拓という自然破壊が進んだこと

四　傍線部(5)「喝破」の文脈に沿った意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 7

1　常識を打ち破り新たな考えを広めること
2　大声でしかりつけること
3　誤りを正すこと
4　当たり前のことを偉そうに言い立てること
5　物事を見抜いてはっきり言うこと

五　傍線部(6)「このアンビバレンス」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 8

1　新しい技術によって生産性が上がり豊かになる恩恵を被る人がいても、一方で技術を使いこなせず貧しくなる人もいるように、格差が大きくなるという不均衡が必ずあること

2　新しい技術の良い面を褒めて持ち上げ心の底から感嘆する気持ちと、悪い影響をいやがったり避けたりしてひどく憎む気持ちと、全く対立する感情が常に同時に存在すること

3　新しい技術により不可能が可能になることをたたえる一方で、その利点を認めつつも効果はごく僅かなものかもしれないという疑問も感じ、技術に対する判断ができなくなること

4　新しい技術には便利で優れているというイメージがあるが、別の見方をすれば安易になって管理されやすいというイメージもつきまとっていて、全体的印象が定まらないこと

5　新しい技術のおかげで困難を解決できるようにはなるが、技術の産物によって物や人間が破壊されたり滅ぼされたりする場合もあるので、絶えず注意が必要だということ

六　問題文の文章の構成や段落の関係についての説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 9

1　最初の二つの段落で提示した問題の答えを、第三段落で示すというように、問いかけの直後の段落で筆者の考えを記すという展開を繰り返しながら、説得力のある論述を進めている。

2　第五段落までがこの文章の序論に当たる部分で、その末尾は「暴走してきたのではなかろうか」という問いかけになっているが、次の段落から示される具体例はこの問いかけを否定している。

3　第2ページのＡＩやロボットが社会に与える影響を記す複数の段落は、「起承転結」の「転」に当たる部分で、論旨とはあまり関係ない説明を加えて文章に変化を与えようとしている。

4　「ロボットやＡＩは、結局のところ、敵なのか、味方なのか?」から始まる、終わりの七つの段落が、この文章の結論に当たる部分で、筆者の希望を含んだ最終的な考えが記されている。

5　最後の段落は、冒頭の段落の問いかけに応えており、最初に述べたＡＩやロボットの特徴に再び言及して終わることで論の話題や筆者の主張が理解しやすい文章になるよう工夫がなされている。

七　次のア～オについて、問題文の内容に合致するものには1を、そうでないものには2を、それぞれマークしなさい。解答番号は 10 ～ 14

ア　ＡＩやロボット技術の発展はすさまじく、生命や人間の側を操作する科学技術の発展も、かつての限界を越えてきている。 10

イ　テレビやラジオなどの機械へ向かってコメンテーターが新商品の情報を発信するという働きかけは、現在の先端技術の特徴である。 11

ウ　現在では、ＡＩやロボットは、人間が果たすべき役割を担い、私たち人間の代わりとなることもある。 12

エ　古来日本では人と人工物との距離が近かったが、現代的な道具の場合も距離が近いかどうかの判断には注意が必要だ。 13

オ　科学技術には害悪もあるが、それを上回る利益を得られるから技術は定着し、技術をうまく扱いながら人類は豊かな社会を実現してきた。 14

第二問　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一八九四年、「忘れえぬ人々」の書かれる四年前、『日本風景論』と題された一冊の本が現れる。(1)国木田の「風景の発見」をつつみ、やがてこれを隠蔽していくのは、まさか勝つと思っていなかった「清」相手の戦争に勝利し、有頂天になった日本人に、それまでとは違う日本、「近代日本」を未知のもの、「風景」としてさしだすことで大ベストセラーとなる、志賀重昂(しげたか)のこの本だったといってよいのである。

志賀は一八六三年、現在の愛知県に位置する岡崎藩の藩士の子として生れ、札幌農学校を卒業後、約十ヵ月の南洋航海を経験して『南洋時事』を著わし、ジャーナリストとして「国粋保存主義」を唱えて三宅雪嶺(せつれい)らと雑誌『日本人』を創刊の後、明治二十七年（一八九四）十月、この『日本風景論』を刊行している。日清戦争は二ヵ月前、八月一日に宣戦を布告されているが、近代日本最初の対外戦争にあたる(2)この戦争が、二十数年前に「作られ」た近代的国家「日本」に帰属する「日本人」意識の定着に決定的な契機をなしたことについてはさまざまの証言がある。たとえば『明治大正見聞史』の著者生方敏郎(うぶかたとしろう)はこう書いている。

「憲法発布前は勿論、その後両三年位までも、私の地方民（群馬人――引用者）は明治政府に心から服従してはいなかった」。「西郷隆盛に同情し、西郷はまだどこかの山の中に生きている、と人々はしばしば語っていた。私たち子供は（……）（戦ごっこをする時――引用者）平家と官軍にされることを、大変屈辱と考えていた」。「老人連は御一新をただ薩長武士の企てた革命とのみ考えていた。もっとも老人たちは東照大権現と唱えて毎朝神棚に向い、徳川家康を拝んでいたのだ」。

つまり、「日清戦争になるまでの私の周囲は、ことごとく反明治新政府の空気に満たされていた」のが、当時とても敵(かな)わない大国と思われていた清国との戦いが優勢に進むと、事態は一変する。九月の平壌陥落は「あっけない位だったが、この時の国民の悦びは全く有頂天という言葉に相当していた」。それまで「私たち」は「支那人を悪い国民だとは思っていなかったし、まして支那に対する憎悪というものを少しも我々の心の中に抱いていなかった」。また「その時まで、私たちが見た物聞いた物で、支那に敵意を持つか軽んじたものは、ただの一つもなく、支那は東洋の一大帝国と見られていた」。しかし勝ちに乗じて「ますます勇む心と敵を軽蔑する心が、誰の胸にも湧いて」くる。生方は、「いまだ薩長氏の新政府にまつろわなかった(3)東北の民草を統一するには、この戦争ほど好機会はなく、またこの位効果の挙ったものはなかろう」、そう記すのである。

『日本風景論』は、この平壌陥落に続く日本軍の優勢に沸く社会のただなかに上梓(じょうし)され、二ヵ月後には改訂再版となる。刊行後約半年の間に現れた書評は八十五種。この本は、結局十年後の増訂版まで十五版を重ね、(4)福沢諭吉の著作に次ぐ明治期有数のロングセラーとなるのである。

なぜこの本が当時このように人々に迎えられたかについては、さまざまな説明が可能だろう。まず、初の対外戦争に勝って、日本人の自分を見る眼、自分の国を見る眼が変わってきたこと、また、江戸期と同様の「眼」で見ていたために気づかなかったが、日本の景観自身が変わってきていたこと――「郊外」が生まれ、「武蔵野」が生じようとしていたこと――、そして最後に、この『日本風景論』が、これまでと全く異なる仕方で、日本の景観を未知の「風景」[5]として人々の前にさしだすものとして現れていたこと。

いま、この本を、これが当時の人々の眼にどのように映ったか、に留意して再読すれば、ここには何より、当時の人々の前に現れようとしていた新旧二種の「探勝的風景」が、その対比を際立たせる形で並置されていることに気づく。簡単にいえば、「日本三景」的な名所的風景と、「日本アルプス」的な西洋的な風景が、挿画、文体、レイアウト、引用（漢詩、和歌、原文英詩、地図、図表、統計）、全ての点で、読者にその対照を訴え、景観意識の変容そのものを強調する形になっているからである。

まず、挿画についていえば、志賀はここで景観の挿画を日本風のものと洋風のものとに分け、しばしばこれを対照的に配している[6]。前者は、後に日本初の官製絵葉書のデザインを行う樋畑雪湖の手になり、後者は年少の海老名明四の手になる。岩波文庫版の小島烏水の解説によれば、この対照を際立たせるため、志賀は、「木版に於て日本式の板目木版と、西洋式の木口木版」とを「両用」している。集中、たとえば「小野の滝」と「田代の七ツ釜」という二種の滝の景観が挿画で見開きに対照されているが、前者は樋畑雪湖の手になる南画風の〝山水画〟であり、後者は海老名が描き、木口木版の彫り師森山天葩が彫った蕭洒[7]な西洋風の、一見銅版画と見まがう〝風景画〟である。当時、これを見た人が、自分の眼にした経験のある渓谷の実景を思い浮かべ、それがここでは一方で、〝山水画〟として名所風に（那智の滝のように）現れ、他方で〝風景画〟として西欧風に（スコットランドの渓流のように）現れる〝錯視〟的対照を味わっただろうこと、そしてそのことに、たとえようもないあるカタルシスを感じただろうことは、想像に［X］ない。

また、用いられている文体についていえば、たとえば彼は日本の風景にいかに［Y］が重要な要因をなしているかと説いて、まず、現在ぼく達が中学校の地図帳に見るのと全く同じ「雨量分布の図（全国平均）」を掲げた後、「小夜ふかく霞の網にいる月を／ひくや湊の海人のよび声」[注1]（正徹）という和歌をあげたかと思えば、次に「霏々漠々満天墜[注2]。云是名妓於菟涙。於菟曾在大磯里。玉貌華顔抜於萃」云々と続く二十行ほどの漢詩（村上仏山）を引き、さらに、何と呼ぶのか、千代紙風の日本古来の絵言葉（？）を「レトロ風」にレイアウトしたのに続けて、以後流麗な美文で行文を連ねる。最後にくるのは、左右に東山道と地域小区分（岐阜・長野・宇都宮・福島・石巻・宮古……）、上下に「北緯・海抜・月別湿度・温度」の項目を置く、いかにも「地理学」風の地名・月別湿度・温度一覧表である。レイアウトは多岐に亘る。原文の英詩の引用にも事欠かない。総じて

この本から印象づけられるのは、(8)これらがいわば全て図像的な〝意匠〟として意識的に駆使されているということであり、この本から連想されるのは、奇妙なことに、昨今のカタログ誌、都市情報誌、あるいは数年前㊎㊁でベストセラーになった『金魂巻』[注3]といった雑誌であり本なのである。

（加藤典洋『日本風景論』による）

注1　小夜ふかく……よび声＝（大意）夜更けの月に霞がかかり、まるで網にかかったよう。漁夫たちの声はその網を引いているのだろうか。

注2　霏々漠々……抜於萃＝（大意）満天に降る細かな雨は、名高い芸者於菟の涙と言われる。於菟はかつて大磯の遊里にあり、その容貌は抜きん出て美しかった。

注3　『金魂巻』＝渡辺和博の著書。一九八四年刊。㊎㊁は同書に使われた符号。

一　傍線部(1)「国木田」は「忘れえぬ人々」の著者である。この作家についての説明として正しいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 15

1　清新な自然のスケッチである「武蔵野」や、短編小説「牛肉と馬鈴薯」などで知られ、自然主義の先がけとなる作品も発表した。

2　「たけくらべ」で一躍文学界に知られ、「十三夜」「にごりえ」など女性を主人公とする名作を生むが、結核により二十代で死去した。

3　軍医としてドイツに留学、帰国後は陸軍軍医総監など歴任する一方で、小説「雁」、史伝「渋江抽斎」、翻訳「即興詩人」などを著した。

4　同人雑誌『白樺』で出発し、「大津順吉」「和解」「焚火」などの自伝的、心境小説的作品をてがけ、やがて大作「暗夜行路」を完成した。

5　短篇小説「鼻」を夏目漱石に激賞され、王朝ものやキリシタンものなど技巧的で多彩な文学世界を構築したが、やがて神経を病み自殺した。

二　傍線部(2)「この戦争が、二十数年前に「作られ」た近代的国家「日本」に帰属する「日本人」意識の定着に決定的な契機をなした」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 16

1　戦争をきっかけに薩長を中心とする明治新政府の力が強まり、大国の中国に対して友好的だった反政府勢力は発言力を失った。
2　戦争を通して、相手国となった中国を軽視する風潮が生まれ、両者を比べて日本や日本人は優れているとする見方が広まった。
3　戦争をきっかけに、近代的な国家が誕生する前の歴史に対する関心が高まり、自らが日本人であることの自負心がより強くなった。
4　戦争の勝利によって日本という近代的な共同体が意識されるようになり、国内のさまざまな対立を越えて、国民としての意識が生まれた。
5　戦争の勃発により明治維新以来続いていた内戦状態が終結し、日本は名実ともに統一国家となり、その一員としての意識が国民に生まれた。

三　傍線部(3)「東北の民草を統一する」とあるが、この中に含まれている修辞上の特徴の説明として、最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 17

1　一部のもので全体を表現する。
2　何かをよく似た別のものでたとえる。
3　文の途中に無関係な要素を挿入する。
4　意味と形式の上で対になる言葉を重ねる。
5　同じ音で異なる意味の言葉を連想させる。

四　傍線部(4)「福沢諭吉の著作」とあるが、福沢の著作についての説明として正しいものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 18

1　「小説の主脳は人情なり」という名高い一節を持つ理論書『小説神髄』
2　「天は人の上に人を造らず」という名文で始まる啓蒙書『学問のすすめ』
3　金のため恋人に裏切られ、金に復讐する主人公間貫一の物語『金色夜叉』
4　出自による社会的差別の問題を扱い自然主義の代表的作品とされる『破戒』
5　紡績工場で働く女性の過酷な労働環境を記録したルポルタージュ『女工哀史』

五　傍線部(5)「未知の「風景」」とあるが、なぜ読者は日本の景観を「未知」として捉えたのか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 19

1　風景を見る自分たちが近代日本の新しい国民意識を持っていたから
2　名所としては注目されてこなかった地域を紹介した風景だったから
3　伝統的な枠にとらわれず多角的な視点で紹介された風景だったから
4　各地のなじみのある風景が徹底して西洋的な方法で描かれていたから
5　日本の風景は近代化にともなう開発のため大きな変貌を遂げていたから

六　傍線部(6)「対照的に配している」とあるが、筆者はそのことが読者に何をもたらしたと考えているか。最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 20

1　安心　　2　解放感　　3　好奇心　　4　混乱　　5　達成感

七　傍線部(7)「瀟洒な」の意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 21

1　生き生きとした魅力があるさま
2　古風で堂々とした風格のあるさま
3　すっきりとあか抜けしているさま
4　繊細ですみずみまで整っているさま
5　装飾が多く豪華できらびやかなさま

八　空欄 X に入る語として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 22

1　いとま　　2　及ば　　3　難く　　4　過ぎ　　5　違い

九　空欄 Y に入る語として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 23

1　風　　2　季節　　3　光線　　4　時間帯　　5　水蒸気

一〇　傍線部(8)「これらがいわば全て図像的な〝意匠〟として意識的に駆使されている」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 24

1　風景画や図表、詩、和歌などが、近代において変容しつつある読者の関心や景観意識に訴えるように配置されている。
2　日本の風景の美しさを強調するために、和歌や漢詩が引用され、山水画と西欧風の風景画が意図的に用いられている。
3　挿絵や図表などを対照させて用いることによって、日本列島の地理学的な情報が一目でわかるように工夫されている。
4　詩や和歌の引用や地理学的な情報を地域区分と関連づけて配置し、各地方の特徴の多角的な理解を可能にしている。
5　西欧風の風景画が日本の伝統的な山水画に劣らず価値を持つことを印象づけるために、英詩がふんだんに引用されている。

一一　次のア～オについて、問題文の内容に合致するものには1を、そうでないものには2を、それぞれマークしなさい。解答番号は 25 ～ 29

ア　福沢諭吉の著作は明治期を通して長く読まれたが、志賀重昂の著作もまた刊行以来多くの版を重ねた。 25

イ　志賀は『日本風景論』で、日本的伝統を残す名所と西洋的な新しい風景とを峻別し、国土開発の方向性を示した。 26

ウ　『日本風景論』がよく読まれた原因の一つに、日清戦争に勝利して日本という国の姿が見直されたことが挙げられる。 27

エ　志賀の生まれ育った地域では、明治政府に対する反発が長く残り、子供たちも戦ごっこで官軍役になることを嫌った。 28

オ　『日本風景論』の挿画は、樋畑雪湖による南画風の山水画と、海老名明四による西洋風な銅版画とが対照的に配置されている。 29

第三問　次の文章は、明治二十一年の『東京朝日新聞』に掲載された社説の一部である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

能く我国の実況を見よ。一方里[注1]に付き人口平均、実に左の如くならずや（明治十九年調べに依る）。

【A】

畿内	五二七五	南海道	二二七一
東海道	三二六三	西海道（琉球を除く）	二〇七四
東山道（旧奥羽を除く）	一四九六	琉球	二三七四
旧奥羽	九五一	北海道	三五
北陸道	二二八八	壱岐	四〇〇七
山陰道	一六〇二	対馬	六七九
山陽道	二五一七	小笠原島	六七

畿内・関東・中国等の、人口稠密なるに反し、旧奥羽の如き、北海道の如き、将た小笠原島の如き、其の稀疎もまた甚だしからずや。(1) しかのみならず、是等人口の稀疎なる処は、其の面積最も大なるものなり。

【B】

畿内	四四五・五九方里	南海道	一五九八・四七方里
東海道	二六五八・八〇方里	西海道（琉球を除く）	二六一七・五四方里
東山道（旧奥羽を除く）	二六〇二・六七方里	琉球	一五六・九一方里
旧奥羽	四二四七・二三方里	北海道	六〇九五・三六方里
北陸道	一六三四・一二方里	壱岐	八・六三方里
山陰道	一一〇九・五五方里	対馬	四四・七二方里
山陽道	一五七〇・二七方里	小笠原島	四・五〇方里

かれとこれとを対照せよ。人口稠密なる処は其の面積小にして、人口稀疎なる処は其の面積大ならずや。畿内・中国辺に於てこそ、人多く、明地

なく、山は拓き尽し、村は村と連なると雖も、請ふ、足を奥羽地方に枉げて仔細に観察せよ。数里曽て人煙を見ず、山林広野空しく狐狸麋鹿の棲む所と成り果て居るにあらずや。実に其の面積は四千二百四十七方里余の大なるにもかかはらず、其の人口四百四万千百五十人、一方里に付き僅かに九百五十一人に過ぎず。而して其の土地は豊沃なり、其の気候は寒熱ともに酷しからず、水産の利を得べき海もあり、鉱業の益を求むべき山もあり。蚕糸の業、最も其の興利に適し、牧畜の利、また求むべからざるにあらず。田にすべくば田にもすべし、畑にすべくば畑にもすべし。交通の便もまた敢て乏しからず、各県とも競ひて道路の改修を了へ、千山万壑また車を通ずべく、海浜河岸また舟楫の利あり。しかのみならず、鉄道もまた奥羽の山野を貫通し了らんとするものあり。遺利拾ふに任せ、収益思ひの儘なり。

内地の外にあらざる奥羽にして尚且然り。更に歩を進めて北海の大島を観よ。其の面積六千九十五方里余にして、人口二十一万五千二百九十八人、一方里の人口僅かに三十五人に過ぎず。(2) なんぞ其の土地の広漠にして人煙の稀疎なるや。而して其の拾ふべきの遺利、興すべきの事業は、彼の奥羽に比して更に莫大なるものあるなり。遺利と謂はんよりは、寧ろ未だ曽て手を着けざるの利ありと云ふべし。

海に山に幾多の事業は其の発掘を待ちつつあるにあらずや。我国土は未だ以て拓け尽したりなどとは思ひも寄らず。(3) 人口既に稠密にしてこれを容るるに足らずなどいふは、寧ろ都人士の管見たるのみ。内、未だ拓けず尚荒れたり。なんぞ去つて外に出づるの遑あらんや。

内、未だ修まらずして外に手足を出すは、未だ以て急務とするに足らず。蓋し、外に手足を出すもの以て内を修むる所以なるものあらんか。なれどこの間自ら先後本末あるを要す。吾人は今偏に海外植民を謀るを以て不得策なり非望なりとは云はずと雖も、顧みて内を考察すれば、更に最も急務なるものあるを信ずるなり。奥羽に北海道に土地未だ全く拓けず人口最も稀疎なり。これを拓きこれを充たすこそ、今日の急務ならずや。それとも、奥羽に北海道に、土地瘠痩、気候不良、物産の興すべきなく、利益の得べきなくんばまだしもなれど、啻に遺利なきのみならず、瘠土ならざるのみならず、実に日本帝国の宝庫なり、吾人人民の揺銭樹[注2]なり。

しかのみならず、産業上とは殊別なる国防上よりこれを言ふも、北海道の如きは最も肝要の大島嶼にして、所謂北門[注3]の鎖鑰なり。これが防御を怠り、これが発達を蔑ろにせんか。国家の不利は殊更に言ふを須たず。蓋し、偏に軍備を増し兵制を整ふるも、其の土地にして荒廃、其の居住人民にして稀疎ならんか。以て充分の防御を得たりとするに足らず、以て完全の兵備を整へたりと云ふべからざるなり。況んや今日の時務たる国家万年の大計、社会千歳の長図を謀るに当り、眼前杞憂の［X］の事を先にせんよりは、国家の要素たり社会の基源たる、［Y］の発達完備を務むること、必須の実業たれ。万々一の国際破裂を慮りて、一日一時も欠くべからざる人生肝腎の産業を後にするは、事業を顧みざるの空言のみ、事を好むの妄慮のみ。勿論、吾人国防を棄つべし軍事を顧みるを要せずとは云はず。事、本末あり、物、終始あるを言ふのみ。然り、其の植民を盛ん

にし其の殖産を謀るは、惟り産業上に於て急務なるのみならず、国防上に於ても急務たるを知るべし。奥羽の如きもまた然り。気候温和、土地豊饒、人煙稀疎、面積広漠、興業に適し、殖産の急なるものあるのみならず、また国防上に於ても、北門の鎖鑰に次ぎ、本邦の北端、龍蛇の頭首、ま(4)た忽せにすべからざるの地なりとす。この必要ありこの急務あり。なんぞ遠く外邦に去つて内を顧みざるの遑あらんや。

抑も外邦に去つて巨利を博せんとするは、悪しきことにあらず、拒むべきことにあらずと雖も、内に拓くべきの地なく、内に容るべきの場所なくんば、海外植民は今日の急務なれども、外を顧みるよりは、先づ内を整へざるべからざるの最大急務あるを如何せん。海外植民の事、未だ以て今日の急務とするに足らざるなり。力を海外に逞しうせんよりは、寧ろ手近く関係最も本国に親密なる奥羽並びに北海道の開拓事業を完成するこそ、今日の最必急務ならずや。且つ夫れ、人を奨むるに当り、其の奮起を要するに臨み、殊更に遠く海外に誘はんよりは、同じ日本国たり同じ一邦内たる奥羽・北海道に誘ふこそ、其の人を得るの道なるべし。

大志あるの人は、注4蕞爾たる日本国内に注5跼蹐するを厭ふべしと雖も、天下大志ある者、百中一のみ、その九十九迄は、小心翼々、(5)胸宇の放曠ならざるものたり。殊に我日本国の如き、昔、山田長政の海外に覇たるものあり、伊達政宗の羅馬征伐を想ふものありしと雖も、概言すれば、壮図を計らざるものなり、故国を離らるるを厭ふの人民なり。今こそ国内一家の如しと雖も、昔は江戸を出づるも猶山河千里の異邦に赴くの心地し、水盃して旅立したる可憐の小胆人民なり。この小胆人民を駆つて、曰く豪州に赴くべし、曰く米国に移住すべしと奨むるも、未だ以て其の甲斐あるを期すべからざるなり。米国僅かに半月にして達し、豪州近きこと隣家の如き今日なるも、一般の人気は未だ地理書を実際に経験し能はざるなり。其の愚、其の陋は(6)憫笑すべきも、社会多数の人間、国家真正の実業家は、実に斯の如き境界にあるを如何せん。

(7)凡そ、事、実際に行ひ得べくんば、即ち可なり。仮令、其の事卓絶、其の謀秀逸なるも、実際に行はれ難くては、何の価値も効能もあらざるなり。海外植民の事、またこの類にあらざるなきを得んや。

（明治二十一年十一月二十三・二十四日『東京朝日新聞』社説「未だ外に出づるの遑あらず」による）

注1　方里＝一里四方の面積。一里は、約四キロメートル。

注2　揺銭樹＝金のなる木。ここでは、次々と金銭を生み出す財源。

注3　鎖鑰＝外敵の侵入を防ぐ重要な場所。

注4　蕞爾＝非常に小さいさま。

注5　跼蹐＝身を縮めて暮らすこと。

一　データ【A】【B】から読み取れる内容として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 30

1　二つのデータはそれぞれ、各地域の総人口と面積を示しており、これらから一方里あたりの平均人口を計算することができる。
2　離島などを含め、旧奥羽や北海道よりも人口密度の低い地域はない。
3　旧奥羽を含めた東山道と北海道とで面積を比較すると、北海道のほうが広い。
4　畿内には、五千二百七十五人の人が住んでいる。
5　小笠原島の総人口は、約三百人である。

二　傍線部(1)「しかのみならず」の意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 31

1　そのことに加えて
2　それに対して
3　そうした理由だけでなく
4　そうであるがゆえに
5　そのことから考えると

三　傍線部(2)「なんぞ其の土地の広漠にして人煙の稀疎なるや」とあるが、ここで筆者はどのように現状を捉え、論を進めているか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 32

1　奥羽と北海道の現状を比較し、本州にある奥羽のほうが開拓は進んでいることから、それをより積極的に推し進めるべきだと主張している。
2　奥羽で交通インフラの整備が進んでいることを指摘し、北海道でも同様に事業を進めることで人口は増えていくはずだと考察している。
3　奥羽は開拓が遅れたことで山林が荒れており、いまだ多くの動物が生息しているため、開拓には困難が伴うだろうと推測している。
4　北海道と奥羽の開拓によって得られる利益は同じ程度であるとし、移住した人々への教育を重視するべきだと結論づけている。
5　北海道には広大な土地があり、開拓の余地が大きいにもかかわらず、それが進んでいないことについて問題提起を行っている。

四　傍線部(3)「人口既に稠密にしてこれを容るるに足らずなどいふは、寧ろ都人士の管見たるのみ」とあるが、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 33

1　都市の人口は過密であり、産業を発達させるための十分な土地がないという考えは、都会人がしばしば持つ思い込みにすぎない。
2　日本の人口は過密であり、より人口を増やすためには産業の発達が欠かせないという考え方は、都会人が持つ典型的な誤りである。
3　日本の人口は過密であり、これ以上人を増やすには国土の広さが十分でないという考えは、都会人が持つ視野の狭い見方にすぎない。
4　都市の人口は過密であり、これ以上人を増やすことができないという都会人の発想は、事実であるという点で重要な視座である。
5　都市に加え地方の人口も既に過密になっており、日本は十分に発展しつつあるという考えは、都会人にとって当然の認識である。

五　空欄 X ・ Y に入る語として最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は X 34 ・ Y 35

1　気候　　2　国家万年　　3　産業　　4　兵備国防
5　土地拡張　　6　海外移住　　7　社会　　8　日本帝国

六　傍線部(4)「忽せにすべからざるの地」の意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 36

1　積極的に活用するべき土地
2　ないがしろにしてはいけない土地
3　災害を抑えなくてはいけない土地
4　どっちつかずの状態にある土地
5　安易に開拓してはいけない土地

七　傍線部(5)「胸宇の放曠ならざるものたり」とあるが、これは具体的にどういうことか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 37

1　かつての人々が江戸を出るだけで異国に行くような気持ちでいたように、日本人が野心を持たず、故郷を離れるのを嫌がるということ
2　かつて伊達政宗が海外進出を夢見たように、多くの日本人が本来、大きな野望を抱いてそれを実現してきたということ
3　海外に移住して成功している人が多いことが示すように、日本人が新しい土地にも柔軟に適応できるということ
4　海外の国々について教科書程度の知識しか持っていない人が多くいるように、日本人が新しいものをあまり学ばないということ
5　海外で活躍するよりも国内で成功する人が多く見られるように、日本人が小心翼々とした生活を好むということ

八　傍線部(6)「憫笑」の意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 38

1　自虐的に笑うこと
2　陰に隠れて笑うこと
3　他者をあわれんで笑うこと
4　虚無的な笑いを浮かべること
5　愛情のこもった笑いを示すこと

九　傍線部(7)「凡そ、事、実際に行ひ得べくんば、即ち可なり。仮令、其の事卓絶、其の謀秀逸なるも、実際に行はれ難くては、何の価値も効能もあらざるなり」とあるが、筆者はここで具体的にどのような主張をしているか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 39

1　北海道や奥州の開拓には多くの困難が伴うため、綿密な計画がなければ実現は難しく、国家の伸張に向けて十分な効果が得られない。
2　日本人の海外移住については、やり方を工夫しなければ途中で頓挫してしまうため、より綿密な計画をたてて推し進める必要がある。
3　人口が過密な北陸道や西海道に住む人々をどのように移住させるかが重要であるため、それを具体的に実現する方法を検討する必要がある。
4　海外移住を進める政策は優れた方向性なのかもしれないが、実現するのが難しいのであれば、そうした計画は意味をなさない。
5　豪州には短期間で行くことができるため、移住事業の実現には多くの方法があり、より良いものを慎重に判断していく必要がある。

一〇　次のア～オについて、問題文の内容に合致するものには1を、そうでないものには2を、それぞれマークしなさい。解答番号は 40 ～ 44

ア　鉱山資源の存在や、養蚕業に適していることなどを根拠として、奥羽の開拓も主張されている。 40
イ　奥羽の鉄道はまだ開設する見込みが立っていないため、できるだけはやく工事を進める必要がある。 41
ウ　北海道の土地は痩せているため、農業を中心に開拓を進めるにはあまり向いていない。 42
エ　海外進出をして現地にいる住民から搾取をすることは、近代国家としてあるまじき野蛮な行為である。 43
オ　日本から米国へは、二週間程度で移動することが可能になっている。 44